

渉 外 (雑談を中心に)

出発前、国内における最も重要なことはまず資料を集めるということであった。そのためにいろいろな人に会い、またアメリカなどから地図、書籍をとりよせ、そしてブラジルにおける現地機関の受け入れ・協力を打診、要請した。また同時に現地事情の収集に力を入れた。しかし日本国内におけるこのような活動では何も確たるものを得ることができず、また様々な悪条件が重なり(“活動日誌”参照)、すべて現地の「渉外」にまかせるということで日本を帰ったのである。

現地マナウスではFUNAIに日参し、またミッションやINPAにも足を運んだ。マナウスでの通訳は日本領事館員の方々や日本人学生寮の方々であった。また調査地においてインディオ間の通訳になっていただいたのがミッショ

ンのブルース、キッチ夫妻であった。また我われづきのガイド兼通訳になってくれたのがバキダリ族のカーロス君であった。

結論を言えば、あてもなく、何も持たず現地に行き、「運」と人の善意によって、あれよあれよという間にヤノマムの部落に入り、また予想外の収穫を得たということであった。そして我われには金はなかったけれど、時間は充分にあり、ブラジルの特に役所のスローペースに合わせることでできたということである。

以下に3人の雑談をとどめておきます。こんどの活動におけるいろいろな事柄や、あるいは隊の、しいてはる人の考え方が、少しでもわかってもらえるのではないかと考えます。

(松本)

雑 談

1973. 10. 23

松本収録

— 出発まで —

松本 なぜアマゾンにいきたいと思ったのだろう。

津田 やっぱり小さい頃からのばくぜんとした「あこがれ」みたいなものが、ずっと続いてあったのところがいますか。

藤本 アマゾンの持つ大きな包容力のような何とも表現しにくいものがあったのですね。

松本 最初は夢みたいにしてやっていたなあ。それが3年間もやっているうちに、それなりに実現するという確心みたいなものがでてきた。まあ、そのあいだ色いろな合宿を考えたな。

藤本 なかでも韓国の単独徒歩をやったのは

印象深かったですね。見知らぬ土地でひとり歩きながら、そこの人たちと語りあう。そんな中で何かが生まれるのではないかと考えて行ったわけですが、ひとりで経験した韓国がやっぱり実になったのではないですか。

松本 行く前は不安だった。皆1年で、俺は2年で実質的リーダーだったわけで、ましてや初めての外国……。でもこれで自信をもった。この時は7人もメンバーがいたわけだが、1人やめ1人やめて最後には3人になった。これはどう感じた。

津田 別にどうということはない。「実現する」という実感がいつまでも手元にこなかった。こんな波間の木の葉のような状態に耐えられない人間がいる。またアホになれる人間がいる。こういうことやと思うんです。

藤本 僕にとって、結局アマゾンへ行かなければ自分の中で何も解決されないというものがあった。それに自分の意志を曲げてまで — 何かに妥協してまで、この計画をどうするというやり方は最後までなかったですね。

津田 まことに要領が悪いというか、ぶきっちょというか……。

松本 そのへんのことで終盤になって、他人に頼るなという言葉が我われの合いことばになったし、それから「忍耐」ということばも。あの頃は1000回 集会をめざして毎日のように集会やって考えたものなあ。(集会数は出発前2年半で約350回。)しかし現役もOBも冷たいと思うことが多かった。

津田 OBから「アマゾンに金魚すくいに行くのか」と言われたりして…。

松本 まあ刺激剤にもなったけれど。

藤本 帰ってからはだいぶ見方が変わったんじゃない。

松本 結局、最後まで我われはOB会には資金面に関し本当のことを言わなかった。言えは「そりゃアカン」とくる。結局金が不足したまま出かけた。あの時は見送られてうれしいというよりも正直、先行き不安だったね。その後、天鷲先生のリオでの渉外がうまくいって、どうにか調査が始まったわけだが、おまえたちがもう少し早く来れば良かったんだが。

藤本 行く前にクラブの仕事が重なってしまって…。でも松本さんが一足さきに単独でヤノム族に入った時も別にあせったり、あのアホとは全然思わなかったですよ。

— マナウスで —

松本 3人が合流した時、FUNAIとの関係はうまくいってたなあ。

津田 FUNAIには我われのメンバーがい

かにも弱少で、面倒なことを言わないし、また馬鹿でいねいに下手から出ていたから、かえってプラスになったんところがいますか。(一応、松本は人類学の助手、藤本は法学生、津田は医学生を自称していたが、FUNAIのボスは気にとめる様子もなし。)

藤本 いま思うと最後まで幸運の女神がついていたんですね。

松本 俺は考えるんだが、3人ともすごく楽天的で、それにFUNAIに絶対無理をいわなかったのが良かったのではないかと思う。エンジン油の中で眠ったり、毎日ファリーナと水ばかりで生活したり…。

藤本 それによくFUNAIには通いましたね。

津田 それにミッションの協力があつた。

松本 ブルース、キッチ夫妻のおかげで「調査」がうまくいった。

津田 我われには金はなかったけど、暇があった。毎日通えるほどの、いくらでも待てるほどの時間がね。同じ頃「すばらしい世界旅行」のスタッフが来てたわけやけど、彼らは大統領の書状は持ってたし、金もあったが、結局時間をもっていなかったのがブラジルにおいては致命的やった。

松本 もっとも我われはFUNAIのほかに行く所がなかった。金がなかったから、全然遊ぶなんてことはできなかった。3人で1日100円位のことがよくあった。

藤本 学生寮の連中がよくなりましたねえ。

松本 年代が同じだったためもあるが、本当に仲よくなった。最初は個人主義的な人が多くて、とっつきにくかったが、帰る頃には全員が同じ仲間ということを感じた。

津田 それに長期滞在によく起こるイライラも彼らと遊んだりして解決されたし。寮の連中のクッション的役割は大きかった。

松本 パーティーや誕生会やらの催しものにはいつも招待されたな。

津田 二世会の時は3人とも「女形」をやらされたりして…。インディオの踊りやってくれといわれたり。

松本 彼らも俺達を指名すると絶対に「いやだ」といわないことを知っていた。(探検部のコンパで指名されたら「イヤ」とはいえない。)

— 調査活動に入って —

松本 入ってから一番苦しかったことは？

津田 病気になったこと。みなが親切にしてくれたので、もう開き直っていましたがね。

松本 俺はもう津田は死ぬと思ったよ。一言のグチも言わないし、俺はあるとき津田という人間を見直したよ。

藤本 同感。

津田 危機感は妙になかったですね。もっとも死んでもええと考えてたからでしょうね。けど、やはりさびしかったし、みなといっしょに部落まで入りたかった。毎晩、眠れませんでしたね。昼ねてたけど。

松本 あれで(暑さ、虫、粗食)病気にならない人は運がいい。エスメラジン(FUNAI職員)やサポートの連中も病気(マラリア等々)になった。

藤本 松本さんがインディオに注射をうったときなど、私も共犯でやられるのではないかと思った。とにかく2人ともはじめてで、びびってしまっただけ。

松本 トトトビ河の入口から(部落手前50kmの所)でカヌーが進まなくなり(減水のため)そのためインディオ2人と我われ2人で部落に

入ると決めたわけだが。

藤本 あのととき結局、津田を他の連中(FUNAIの職員ら)と残したのですが、結果的に病気の津田をどうするかについて何も話し合わなかったことがよかった。3年間一緒に飯食って、何を考えているかわかってたし、暗黙のうちに了解できたのです。

松本 出発の1時間前にエスメラジンが我われ2人(松本、藤本)を行かせることを承認してくれた。このとき他の連中(FUNAI職員やサポート員)からかなり反対意見が出た。(歩いて行けば死ぬ。他に日本人2人だけを奥地にやることは危険で好ましくない)

藤本 結局はエスメラジンが我々を全面的に信用してくれたということですね。

松本 藤本、苦しかったことは？

藤本 バラフリ部落の行き帰り。裸足でジャングルを歩いて、ヤシのトゲなどがささってはあがってたもんね。

松本 あの時はずっと苦しかった。俺は藤本のあんなに苦しい顔を見たことがない。(我が部のトレーニングはきついが、彼のばてて苦しそうな顔はかつて見たことがない)

津田 一番楽しかったことは何ですか？

松本 ブリニョ部落のダンス、驚いたのは出産。

藤本 大きなナマズを釣ったり、ワニを食べたり、それにあの粒の雨、強烈な太陽。やっぱり何といってもスケールの大きさですね。

— 結論 —

松本 長期滞在のわりに調査期間が短かったがどう思う。

津田 仕方なかった。あれがいっぱいでしょ。本来は予定したことが全部アカンようになってゆくことがこの種の遠征には多いのに、我

われは運がよかった。

藤本 もう一度入る予定で努力したけど、ダメになって……。でもあれが精一杯だったかも。結局、松本さんを残して津田と一足先に帰ってしまった。でもやっぱり日本に着いて「しまった」と思った。

津田 日本の風は冷たかった。

松本 俺は待ちにまって結局、風邪によるブラジル全域にわたる入域禁止令が解けなかったので仕方なく帰ってきた。もう金もなかった。

津田 あれからだいぶたちましたね。

藤本 みな元気ですかね。

松本 もう一度来るとヤノママたちに約束したので、これを果たしたい。

藤本 いろいろな人に世話になりっぱなしです。

松本 友達、両親、先生方、現役、OB、我われがここまでできたのはやっぱり運がよかった。

津田 結論ですね。

3人で Muito Obrigado (どうもありがとう)

